

## 散在地域における新規こども向け日本語教室の立ち上げと継続した運営に向けて —グループ活動を取り入れた指導—

川崎千枝見（山口大学、こどものための日本語教室）

橋本加代（山口大学、こどものための日本語教室）

藤田知美（山口市立小学校、こどものための日本語教室）

武部光絵（こどものための日本語教室）

### 1. 教室の概要

#### 1.1. 地域の特徴と教室の開設状況

当教室は人口 20 万人程度の地方都市にあり、2020 年の在住外国人数は約 1900 名、日本語指導を必要とする児童生徒数は 30 名程度(2021 年度)で、その多くは散在地域在住であり、日本語学習の機会が非常に限られている。この一助となることを目指し、2021 年に最初の教室を開設し、2023 年 2 月現在、メイン教室のほかに市内 4 か所の個別教室とオンラインで指導を行い、約 40 名の子どもが参加している。また、人材の育成を行い持続可能な教室運営を目指している。小島(2021)の指摘する「4 ない問題」から当教室をみると「しくみ」を作りながら「経験や情報」を集め蓄積し、「人やお金」を集め、育てている段階である。

### 2. 現在の指導

#### 2.1. 本教室の目標

散在地域における日本語学習機会の確保、教科学習を補助する場としての役割に加え、日本語に触れる場、コミュニケーション能力向上の場、安心できる居場所となることをめざしている。

#### 2.2. メイン教室（週 1 回、平日夕方 2 時間）

現在は未就園児（保護者同伴）から小学生が 20 名程度参加している。当初 1 対 1 で支援・指導していたが、子どもの人数の増加、年齢やニーズの多様化、さらにボランティアの流動性を考慮し、グループ活動を取り入れた指導体制に移行した。前半は学校の宿題等個別学習、後半は日本語レベルと学年・年齢によって以下の 4 グループに分かれ、次のような活動をしている。

①未就園児・未就学児（親子参加）では、親子での手遊び、絵本の読み聞かせ、折り紙、線を書く活動、②日本語基礎グループでは、基礎的な語彙・表現や文字の学習、③日本語会話グループ（低学年）では、「イラストの間違い探し」などを用いて西川・青木（2018）で指摘されている語彙力を補い、場面を描写する力を養う活動、④日本語会話グループ(高学年)では「世界中のペットの数を推測する」など、情報検索や、自らの考えを表現し他者に伝えたり交渉したりする力を養うための活動を行っている。

#### 2.3. 個別教室、オンライン指導

個別教室は散在地域の児童生徒の学習機会を増やすことを目的として、地域センターを会場に週に 1 回実施している。こちらも日本語指導や学校の宿題などを行うが、各教室 1～4 名と子どもの人数が少ないことから、落ち着いた環境で学習ができ、また対応するスタッフ・ボランティアが比較的固定されていることから計画的継続的な指導ができる。なお、個別教室に参加している子どもの多くは、保護者・スタッフの送迎によりメイン教室にも参加している。

オンライン指導は現在、①日本語での基本的なコミュニケーションができる中学生、②遠隔地在住者（小中学生）、③個別教室での補助的指導がある。

#### 2.4. 教室間のつながり

メイン教室は散在地域在住の子どもたちにとって、同じような環境にある子どもと会うことができる場となっており、子ども同士で母語を話す機会ともなっている。グループ活動内でのディスカッションや、苦手な課題に取り組むことなど「複数人で学ぶ」場としての役割は大きい。

### 3. 組織運営について

当教室は市民団体である青年海外協力隊山口県OB会が運営している。会場や資金調達等担当の全体コーディネーター、学習面や保護者・スタッフとの連絡調整等担当の日本語教室コーディネーターを中心に、日本語教師スタッフやボランティアで構成されている。さらに「こども支援PBL（課題解決型学習）プロジェクト」<sup>1)</sup>で人材の育成も図っている。また、教育委員会、県国際交流協会、小中学校への働きかけや関係づくりを進める中で、現在はスタッフが非常勤講師または支援員として市内の学校で支援・指導する場が増えている。

### 4. 目標の達成度

散在地域における「日本語を学ぶ場を作る」という課題に対しては、メイン教室を中心とした学習と交流の場を作り継続することができており、一つの形ができたのではないかと考えている。日本語学習に関して、グループ活動を取り入れたことで日本語を使う力についても次第に効果が表れている。子ども同士のやり取りを重視しつつ、隣にいるボランティアが一人一人の発話や理解を促して支えている。また教室運営の面でも、グループ活動担当をボランティアが相互に担当することで、日本語指導ができる人材の育成の場ともなり、その他、教材準備、ボランティアの担当決め、情報共有などの面で効率化も図れた。

### 5. 課題

1点目は子どもたちの多様化への対応で、未就園児から中学生の高校受験支援までと広がっており、指導体制作りや担当者の確保が課題である。2点目はボランティア・スタッフ内でのコミュニケーションの確保である。時間的制約が多い中、方法や手段を検討しているところである。

#### 付記

本教室は「2022年度ドコモ市民活動団体助成事業」「令和4年度新たな時代の人づくり協働推進事業補助金」による助成金および寄付を募り運営しています。ご支援くださるみなさまに感謝申し上げます。

#### 注)

1) 2022年7月～2023年2月実施。20～30代の若者が対象。山口県の「令和4年度新たな時代の人づくり協働推進事業補助金」の助成を受けて実施。

#### 【引用文献】

小島祥美編著(2021)『Q&A でわかる外国につながる子どもの就学支援——「できること」から始める実践ガイド』明石書店

西川朋美・青木由香(2018)『日本で生まれ育つ外国人の子どもの日本語力の盲点』ひつじ書房